

かメインストリームにはならないのですが、多くの分野を見ることになりしますので、相対化する力は付いたと思います。

——そのような専門の立場から、今改めて森林に求められている役割や機能を考えると、時代の流れの中でどのように変化してきたと思われますか。

下村 木材資源から環境へといったところで、いずれにせよ機能的な見方が色濃く、生活の場としての認識はまだ希薄だと考えています。戦後は林業という産業的視点からの認識が非常に強くなり、生活の場として森林を見つめることが希薄になってしまいました。加えて、今の社会は森林と生活がかい離しているのです。環境を支え保全する存在という機能的な見方は出てきましたが、人々が生活を繰り広げる身近な存在としては十分に認識されていないといえます。その意味で、われわれの分野からの森林へのアプローチの難しさを感じています。

そして現在、産業構造の中で林業は大変厳しい状況にあり、みんながどうすればいいか悩んでいます。行政も公益的機能に比重を移し、森林が持っている地球環境保全や水源涵養^{かんよう}などの機能に注目するようになりました。

興味深いのは、行政では「公益的機能」という言葉を使っていますが、学の世界では「多面的機能」という言葉を使っている点です。2001年に日本学術会議が農林水産省からの諮問で農業と森林の多面的機能の経済価値を計算したことがあり、森林は約70兆円という数字を出していますが、この時も多面的機能という表現を使っています。

公益的機能と多面的機能は必ずしも明確に使い分けされているわけではありませんが、木材資源供給という概念をどこまで盛り込むかの差といえます。行政は一般会計で処理したいという意図もあって、公益性を重視する意味で公益的機能とっているようですが、「学」としては普通に考え

ると一定の収益性があるので、そのことも含めた形で森林の持つ機能を考えたいと思っています。

一方、森林との付き合い方に対する人々の認識は、今は非常に微妙です。現代社会では、自然は保護しなければならないという考え方が一方にあります。ずいぶん変わってきましたが、森林をはじめ自然に人手を加えることに対して拒絶感があります。木を切ることに對して、世論の反目があり、それをもっと払しょくしなければいけないというのが、森林サイドの認識といえます。

環境省の統計では、日本の自然環境は農地も含めると約7割が2次的な自然です。本当の意味で人手の入っていない森林はほとんどありません。その7割の自然環境をどうやって維持していくかは大きな課題です。ある程度は原生自然に戻していくことも考えねばなりません。基本的には人手を入れ続ける管理作業が必要です。ところが、今の社会はそうした理解が薄いといえます。里山という概念が知られてきたため、以前より理解は広がっていますが、まだまだでしょう。

われわれとしては、人が森林に手を入れながらうまく共生する、管理していくという考え方を広めていきたいということもあって、多面的機能という言葉を使っている面もあります。

専門ではありませんので試算はしていませんが、これからの森林経営・運営はある種の^{*1}デカップリング政策のような考え方が必要ではないかと考えています。もう森林は、そのような概念で運営していかないと難しいと思います。

今、行政では公益的機能を有する存在として一般会計で処理したいと考えているようですが、民有林で営業している森林にまでお金を出すのかという議論もあります。ただ、現実には30～40年と育てても、杉でも1本3,000～4,000円くらいにしかなりません。そもそも経営が成立していないのです。一方で、環境保全機能や水源涵養、あるいは生活を豊かにしていく機能はその間に蓄積されて大きな機能を発揮しています。その対価は支払ってもいいのではないで

※1 デカップリング

農業地域や農業者など条件不利地域を対象に、価格政策をやめて直接的所得補償を行う政策。EUなどで普及した。

した二酸化炭素の6、7割は演習林の森林が吸収すると試算しています。

こうした側面を含め、いろいろな収入の道を考えてみましたが、結論からいうとまだ筋道を探している段階です。実際にお金が動かないと、雇用も発生しませんし、管理も進みません。お金を生み出すためにどんな道があるかをしきりに考えているのですが、まだこれだというものが見えない状況です。

一方、先ほどの観光的側面で、研究を進めていることの一つに、広くお金が集められないかという視点があります。これまで地域の自然管理の費用は、基本的に産業面での収入と、土地管理や農林業推進の補助金を中心とした税金でまかなっていたといえます。しかし、今は産業や補助金等による都市域からの還流が難しい時代になりました。その一方で、森林環境税といった新たな仕組みも広がってきています。環境保全協力金を導入する地域も見られます。

つまり、第1次産業が厳しい状況になり、行政からの補助金も難しくなって、森林や緑を維持するには、従来からの仕組みではカバーできなくなってきています。しかしながら、都市域に集積する資金や人手を地方に還流させるために、広く薄く資金を集める道が開けてきつつあるのではないかと感じています。例えば、「アサヒスーパードライ」を購入すると1本1円が都道府県の自然や環境などの保全に活用されるとか、環境保護のための寄付金が上乘せされたパッケージ旅行が販売されるなど、いろいろな事例が見られるようになりました。

環境保全協力金や環境税などに対する理解は一般市民に徐々に広がってきていると感じます。

——森林環境税は、高知県が先駆的に導入し、その後全国的な広がりを見せていますね。

下村 今では30県以上で導入されていると思います。協力金の場合は、地域を訪れ環境のアメニティ

を享受する人たちが負担する形式ですが、森林環境税の場合は、下流域、都市域にいる人たちを含め全員がその費用を負担することになります。ただ、基金の規模が各県で差があるようですね。

地域の個性が現れる森林景観

——先ほど演習林の話題がありましたが、北海道にも富良野に演習林がありますね。

下村 はい、ずいぶん富良野にも行きました。道内では1カ所だけですが、面積は22,000haもあります。残念ながら、地域との連携や演習林の活用という点ではいろいろな制約があって、完全に開かれた空間にはなっていません。旅行代理店などから観光的な活用ができないかという話がありますが、教育研究施設であるという位置付けや人員の問題などもあり、そこまで広げていくことは難しい状況です。ただ、観光資源としては1級のものだと思います。自然の生態系に委ねながらも、人間が手を加えてサイクルを早めるという考え方で施業していて、森林としても非常に美しい。林道も900kmくらいあり、道路だけでも東京～九州間に近い距離が整備されています。

——ところで、これからの北海道における森林の可能性ということで、例えば景観の分野などで何かご提言があれば、ぜひお聞かせください。

下村 そこが一番難しいところです。先ほどお話ししたように、風景というのは地域ごとに個性があります。意外とその点が受け入れられていないと思います。地域ごとに個性があることを皆さんあまり意識していませんし、風景・景観の世界でも、必ずしも十分認識されていないのです。

工学的な分野ではマニュアルのようなものがあり、取り扱いに関しても原則論が求められます。工学理論はインターナショナルを志向し、いわば地域差を克服していく技術です。一方、

農学は基本的には地域技術的な側面があります。近年の農業は少しずつ薄れてきているかもしれませんが、少なくとも森林は地域によって大きく異なります。伝統的な地域技術があり、それが景観にも影響します。北海道には天然杉はありませんが、本州では同じ杉林の風景でも九州や吉野、北山など、いずれも全く違う風景です。私もいろいろな地域の計画に関与してきましたし、同時に景観マニュアルづくりにも関与してきましたが、一般解に頼ってはいけないというのが風景計画の基本だと考えています。

ですからこの場で、北海道についての具体的なお話はできないのですが、一つ感じていることがあります。北海道では、歴史や里山というところと少し引いてしまうところがありませんか。北海道の方は、よく「北海道は歴史がない」といわれますが、100年もあれば十分な歴史です。

例えば、十勝や中標津の防風林などは立派な地域遺産です。昨年10年に大学で「国有林の過去・現在・未来」というシンポジウムを開催したのですが、そのパンフレットの表紙に国有林の分布を表した画像を掲載しました（写真右）。地形や行政面での境界線は描かれてい



ませんが、国有林は国土面積の2割を占めており、それを示すだけでほとんど日本の形を読み取ることができます。格子状の防風林も読み取り可能です。北海道は特に国有林の面積が多いので、国有林とのかかわり方だけを考えたとしても、西日本と北海道では全く違うといえます。国有林の分布を単に上から見るだけでも地域によって違うことがわかります。ましてや目の前の風景は全然違うもので、風景にはその地域の森林の特徴が現れます。

まず、地域の特徴が何かを考えてください。風景とは、基本的に人と土地、環境とのかかわり方で変わってくるものです。風景を考えるということはそのかかわり方を考えるということです。この点を理解していただき、それぞれの地域で自然や森林とどのようにかかわっていきいいかを考えていただきたいと思います。

——実践的なシナリオは各地域によって違うのですが、共通のメッセージはあるように思います。

下村 一ついえることは、きれいな景観をつくる、美しい風景をつくるということを目的にしないことです。景観や風景というのは目標や目的ではなく手段です。お母さんが子どもの表情を見て、体調を確認するように、たたずまいを見て、そこがどんな地域なのか、どんな状態にあるのかを感じることができれば、地域の個性や様子も見えてくるはずで。土地の風景、景観というのは、そういうものです。表情が生き生きしていると、その人は豊かに暮らしていると感じるように、風景に魅力があれば、コミュニティのあり方、土地と暮らしのあり方が非常にうまくいっている、調和がとれているということだと思います。住民の方々は風景を見ながら、地域が荒れてきているか、調和させるにはどうしたらいいのかということを考えていってほしいと思います。

——地域経済では、単にお金を稼ぐだけでなく、そのお金がしっかり地域の中で回っているかどうか重要です。収入と循環というか、経済のバランスが取れていることで、地域に活気が出てくると感じるのですが、そのことと似ているように思います。

下村 そうですね。うまく森林と付き合っていくことで美しい森林が出てくるでしょう。うまく付き合えるということは、地域が何らかの形で潤っている、動いているということですから、そういう仕組み、循環をどう作り出していかと

ということが大切だと思います。

エコツーリズムでさまざまな循環を生み出す

——エコツーリズムという側面ではいかがですか。

下村 風景や地域文化、歴史などは地域の個性で、それがツーリズムの資源になり得ます。最近では観光資源の質が変化してきています。滝や湖などのモノではなく、風景や文化、あるいは情景というような抽象的なものが観光資源として認識されるようになり、これらの資源を生かしたエコツーリズムが一つの方向といえるでしょう。その中では環境保全協力金などの導入も検討できるでしょうし、さらに、一度来た人がリピーターになってくれる可能性も追求していく必要があります。そういう人たちが準住民のような存在になれば、地域資源を管理する新たな仕組みもできるのではないかと考えています。

地方では地域内だけで土地を管理していくことが難しくなっていますから、下流域に住む人たちが企業などがそうした地域の管理に参加していく仕組みが創り出せないかと考えています。

——流域という圏域で森林の役割を考えていくことも大切なような気がします。

下村 森林の世界で流域という考え方はよく出てきますが、今はいろいろと試行錯誤している段階だと思います。例えば、産業面でも、国際化で取引や検討の範囲が広がっている側面と、地産地消のように地域で生産したものを地域で消費するという両面の動きがあります。林業も、昔の製材業などは小さな企業が多く、地産地消的な側面があった一方で、大規模化するには大消費地に近いところに立地するという両面の考え方がありました。ですから、どのようなモデルを組むかということでしょう。それは国土をいかに管理していくか、運営していくかと



いう方針とも関係しているのですが、まだそのイメージが共有されていないように感じます。

いずれにしても今は転換期といえます。経済の仕組みも大きく変化しています。生産したものを販売して対価を得る仕組みばかりではなく、お金も全く別のところから動いてくる時代です。その典型がインターネットのグーグルです。利用者は情報そのものにお金を支払っていませんが、別途、企業からお金が入ってくる仕組みになっていて、お金の動きも従来とは変わってきていることを感じます。人もボーダレスになる一方で、アイデンティティを求めていく動きもあります。さまざまな仕組みが変わってきている時代ですから、新たな社会システムの構築を模索していく必要があります。

ツーリズムについても地域運営や地域経営などとの関係をシステムモデルに組み込んでいくことが重要であると考えています。

——ただ、グローバルな市場の中で地域の価値を改めて見つめ直し、戦略的に組み込む上で、ツーリズムは可能性があると思います。それを取り込む戦略があるかどうかで地域差が出てくるように感じます。

下村 われわれの立場からいうと、観光には人と土地や環境とのかかわり方を再認識させてくれるという側面があります。近代は国際シヨナルの技術によって、土地や環境の制約からいかに逃れるかという意識が強かったと思います。モビリティを高めて機能的、効率的に生活できるよう努力してきたわけです。そして昨今では、情報社会化がさらに加速して、現実にはあり得ないような空間や世界を映像で作り出しています。そうした世界に入り込んできた世代が増えて、現実か夢か、リアルかバーチャルかの境界が曖昧な社会になりつつあります。

ところが、人間が豊かに暮らしていこうとすると、空間的にも社会的にも自分の位置付けを

見つけていく作業が必要です。私たちの分野ではそれをオリエンテーションといいます。実存とでもいいでしょうか。人間は常に空間をイメージして、その中で自分がどこにいるかを見つけて安心するものです。例えば、砂漠の中にいる自分を想像すると不安になると思いますが、それは空間の中に居場所がオリエンテーションできないからです。これは空間だけでなく、社会的な関係でも同じです。自分は社会の中でどのように位置付けられているのかを認識することで安心できるはず。また時間も同じです。家族や地域の歴史の流れの中で、今の自分の暮らしの位置付けを確認することも大切です。

今はそういうオリエンテーションがどんどん希薄になっています。観光や造園などの分野にはそれを引き戻し、オリエンテーションが容易な社会を構築する役割があると考えています。地域個性というお話をした背景はまさにそこあります。その地域の風景の中には、おじいちゃんやおばあちゃんたちがどのように暮らしてきたかという記憶が残されています。その場所で人々がどう暮らし、どんな関係を築いてきたのかということが風景の中に刻み込まれていけば、それを追体験できます。この地域ではこうだった、ほかの地域では違ったなどと相対化していくことで、環境やコミュニティとのかかわり方について再認識する機会を提供することができます。このように観光には、地域の記憶を掘り起こし、地域資源として共有する機会を提供する役割もあると思います。

経済的な循環を生かした地域管理は重要で、土地と人とのかかわりを維持する、あるいは新しい良好な関係を見出すことに資金を投入することで、よい循環を生み出す地域になっていくように思います。

——その中に森林の新たな価値を生み出す役割も入ってくるのですね。

下村 都市の中では自然環境とのかかわりが

少なくなってきました。また、森林の中に入ること、多様なかかわり方ができるので、選択肢が広がります。里に近いところと、奥山での違いもあります。人と環境とのかかわりという点では、里に近いところが多様化していて、自然の営みを深く理解するという点では奥山の方が適しているのですね。

これからの北海道を考えるヒント

——北海道らしさを生かした取り組みについて、いくつかヒントをいただければと思います。

下村 北海道は、本州とは大きく違います。どちらかというと、イギリスなどの森林の風景に近いと思います。緯度の関係と草地との関係が本州と違うのでしょう。農業生産や酪農など、森林と草地が接している場面が多く、森林の境界線がはっきりしているように思います。本州の場合は、草地が減ってきたことと、森林と畑地の間に集落があるケースが多いことから、森林の境界線を見る機会が減ってきています。日本の植生で最も減少率が高いのが草地です。森林の場合は、人工林化は進みましたが、量的な側面に関しては、この50～60年は大きな変化がなく、植生としては減っていないのです。家畜も少なくなり、軍馬もいなくなったので、放牧がなくなり、草地が大きく減少したわけです。本州はそれがはっきり表れています。でも、北海道ではイギリスのカントリーサイドのような風景があり、明瞭な森林境界が特徴的です。そんなふうに風景を見ていくと、より具体的な地域個性が見えてくると思います。

これからは、それをどうやって維持していくかということも考えることも大切です。例えば、木曾の開田高原。木曾馬の産地だったので草地が残っていて、御嶽山との取り合わせの風景が写真家に人気だそうです。木曾馬は農耕馬なので、今はその活用はほとんどないのですが、ホースト

レッキングなどのレクリエーション的な活用が可能であろうと思います。木曾馬を現代に位置付けることで、特徴的な風景をひいては地域の記憶として残していくことが可能になると考えています。

また、北海道には大面積の国立公園が複数ありますが、環境学習の場としての国立公園の活用も重要な課題です。貴重な自然を守るという意味で特別地域はしっかり守っていくべきですが、人と自然とのかかわり方の回復や再認識という意味で、普通地域の利活用が重要課題です。人間のアクティビティーから大切な自然を守るための装置が国立公園といえますが、そろそろ模様替えの時期ではないでしょうか。現代では普通地域が重要性を増してきていますので、時代の変化の中で国立公園の利用もどうあるべきかを改めて考える必要があると思います。

——昨年、下村先生は阿寒湖温泉の景観を考えるワークショップでご講演をされていましたが、阿寒湖温泉の印象はいかがでしたか。

下村 観光ではきれいに景観をつくりましょうという意味合いが強くなりがちですが、その地域が生み出してきた風景というか、その場所とどうかかわってきたかということ、もっと情報として景観に組み込むべきだと思います。

例えば、阿寒にはアイヌコタンがあります。阿寒の場合は造形的に作り出したものだと思いますが、アイヌの集落のあり方も地域によって違っていたと思います。湖の近くのアイヌ集落は本来どのような集落形態で、それがどのように周辺自然とかかわっているのかが伝わるような風景づくりや情報提供プログラムがあればいいなと感じました。

アイヌにおける価値観や生活の中での自然とのかかわり方などを見直すことで、北海道の個性も見えてくるように思います。文化庁では暮らしや生業などその地域の風土によって形成された文化的景観を文化財として選定しています。特に重要な景観である重要文化的景観に、平

取町の「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」が選定されており、これが一つの参考になると思います。

また、開拓時の森林とのかかわり方を見直してみることも大切です。北海道は暮らしの中で森林資源の恩恵をたくさん受けてきたと思うので、そうした中からきつと北海道の地域ごとの個性が生まれてくるように思います。

料理も同じですが、風景や景観は地域を伝えるある種のメディアと考えるといいと思います。ぱっと見て、この地域は面白いということを感じてもらえるような料理や人の振り舞いと同じように、風景や景観もそんなものだと理解していただきたいと思います。そうすることで、本当の意味での観光にもつながっていくでしょう。

——地域経済の分野でも、地域の伝統や独特の風土を見直すことで、自力でお金を稼ぎ出すことにつながる、持続的な経済力につながるという話をよくしますが、それは景観にもつながっているのですね。そう考えると、森林という言葉でとらえることで思考を停止してしまうことがあるように感じました。

下村 われわれも「緑」とか「もり」とかいろいろと表現を工夫しようと努力しています。

——森林という言葉から受ける狭い印象を払しょくして、幅広い視点で考えていくことが大切なようですね。今日はありがとうございました。

聞き手 釧路公立大学学長・地域経済研究センター長
小磯修二（こいそしゅうじ）

PROFILE

下村 彰男（しもむら あきお）

1955年兵庫県生まれ。'78年東京大学農学部林学科卒業、'80年同大学院農学系研究科林学専門課程修士課程修了。㈱ラック計画研究所を経て、'86年より東京大学農学部助手(林学科・森林風致計画学講座)。'93年同助教授、'96年東京大学大学院農学生命科学研究科助教授、2001年より現職。'07年4月～'09年3月まで附属演習林長も務めた。著書に『都市美』『人と森の環境学』『森林保護学』（いずれも分担執筆）など。